

研究課題

# 自分の思いや考えをしっかりと表現できる児童の育成

副題

～国語科の指導におけるICTの活用を通して～

学校名	都城市立高城小学校
所在地	〒885-1202 宮崎県都城市高城町穂満坊20番地
学級数	14
児童・生徒数	382名
職員数/会員数	25名
学校長	藤井 万義
研究代表者	水野 宗市
ホームページ アドレス	<a href="http://www.miyazaki-c.ed.jp/takajo-e/">http://www.miyazaki-c.ed.jp/takajo-e/</a>



小学校

## 1. はじめに

本校児童は、大変素直であり、教師の言うことをよく聞きながら、学習に前向きに取り組んでいる。しかし、自分の考えや思いを話したり書いたりすることは苦手である。「自分の考えや思いをしっかりと表現できる児童の育成」のためには、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めていく」ことが大切である。そのためには、特に国語科の指導に重点を置き、表現力・思考力や想像力及び言語感覚を養っていく必要がある。また、国語科の基礎的な内容をしっかりと定着させる必要がある。本校は、昨年度より「自分の思いや考えを相手にしっかりと表現できる児童の育成」という研究主題の下、指導方法の工夫を授業実践を通して校内研究に取り組んできた。その中で、文章をしっかりと読み取るための支援の一つとして、文章や挿絵・文と関連した画像提示など ICT の活用を取り入れた実践に取り組んだ結果、成果として現れてきている。

## 2. 研究の目的

先進校等の実践より ICT 活用の「よさ」として、次のような点が挙げられる。

- ★ 何度も繰り返し見ることができる。
- ★ 拡大して見ることができる。
- ★ 様々な情報を収集して提示することができる。
- ★ 文だけで分かりづらい面を画像等の活用により、視覚的にサポートすることができる。
- ★ 視覚、聴覚に訴えることができる。

これらの「よさ」を通して、児童一人一人に、「意欲の向上、思考の補助、基礎的・基本内容の理解の定着、興味・関心の高揚」といった学習の中での効果が考えられる。

以上のような ICT のよさを念頭におき、国語科の指導の中に「ICT 活用」を取り入れ、授業実践を積み重ねていくことが本校の研究をより深めることにつながると考えた。特に、国語科の授業に対して苦手意識を持っている児童や国語科の内容に対して理解が十分でない児童など、「ICT 活用」を行うにあたって、対象児童を明確にして活用する。それにより、教師の活用意図も明確になり、ねらった効果が得られたかどうかとも判断できると考えた。

## 3. 研究の方法

1年間の授業実践の中での具体的な活用として、次のような点を考えた。

- ① 文章の内容把握（読み取り）をしっかりと行うための拡大提示（文章の提示、重要文・重要語句の確認、挿絵・画像の提示）
- ② 場面の様子のイメージ化を図り意欲を高めるための拡大提示
- ③ 学習のポイントを確実に理解するための活用（放送番組の活用）
- ④ 客観的に自分の話し方を見直すための工夫
- ⑤ 漢字や熟語の読みや基礎的な言語事項を覚えるためのフラッシュカード的活用
- ⑦ 放送教育の推進（言語活動を通じた伝統や文化に関する教育の充実）～小学校4年生における学校放送番組「ひ

ようたんからコトバ」の効果的な活用を通して～

①～⑥の活用は、各学年（低・中・高学年）において、年間指導計画と関連して、表現力育成の効果が期待できる2単元において授業実践を計画し、ICT活用のねらい（誰に対して、目的は何か等）とその効果について検証していきたいと考えた。⑦については、別途年間計画に位置付け実践を行っていくこととした。

### (1) 実態把握について

本校の研究とも関連して、児童の表現力を育成することをねらいとして実践を行うにあたり、下記の点について、実態把握をして、授業実践後に再度実態把握をしてその違いを検証する。

なお、低学年については、児童自身による意識調査は難しいと判断して、教師の判断により行うこととした。

#### 【アンケート】名前（ 低学年）

1 表現しようとする意欲を持つことができる  
 ① 相手に対して進んで表現しようとする  
 ② 自分の思ったことや考えたことを伝えようとしている  
 ③ 人前で進んで発表しようとする  
 2 自分の気持ちや伝えたいことを表現できる  
 ① 自分の伝えたいことを考えながら表現する（絵、文等）  
 ② 自分の伝えたいことの要点をいえる（書簡）

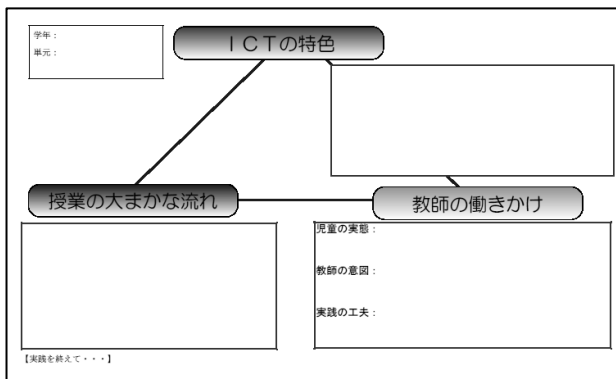
（中・高学年） 1：できない 2：あまりできない 3：すこしできる 4：できる

		1	2	3	4
1-①	他の人が発表しているとき、相手の人を見てうなずいたり、きちんと話を聞いたりすることができますか。				
1-②	自分の思ったことや考えたことを進んで発表していますか。				
1-③	みんなの前で大きな声ではっきりと発表できますか。				
2-①	一番大切なことを言ったり書いたりできますか。				
2-②	見たことや読んだことを整理して話すことができますか。				
2-③	まとめたことをみんなの前で自信を持って話すことができますか。				
2-④	相手に伝えるために、絵画や資料を見せながらくわしく話すことができますか。				

### (2) 授業実践シート（①～⑥）の活用

実践を行うにあたって、教師の意図や ICT 活用の意図を明確にするために「授業実践シート」の活用を行うこととした。

授業実践シートは、ICT の特色（ICT の効果）、授業の大まかな流れ（授業の中での ICT 活用の位置づけ）、教師の働きかけ（対象児童、教師の意図）を連動させて実践を行うことを意識できるような形にした。また、授業後、意図した効果が得られたのか、児童の反応はどうであったのかを記す欄を設け、次の実践へつなげるようにした。



### (3) 伝統や文化に関する教育の充実（⑦の実践）

「ひょうたんからコトバ」という番組は、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（2004年）や中央教育審議会答申や新「学習指導要領」（2008年）で求めている『小学校から「古典」などをとおして、「ことわざ」や「慣用句」、「故事成語」などに触れること』についての学校での取り組みをサポートすることを主なねらいとしている。番組のホームページには『子どもを取り囲む言語環境が貧しくなりつつある今日、本番組は教室における子どもと言葉との出会いがより豊かで楽しいものになるようにできるものとする。』と記されている。本校の研究を側面から支える一つの手立てとして、学校放送番組を活用しながら児童の意欲を高め、言語活動を通じた伝統や文化に関する教育の充実による「言葉への関心を持つ児童の育成」を考えた。

## 4. 研究の内容

### (1) 文章の内容把握（読み取り）をしっかりと行うための拡大提示

○読み取りが十分でない児童に対して画像（たんぼぼの「根」等）を提示し、視覚的に理解を深める。

☆文章と絵とを比較し、文章で書かれている事実を確認することでイメージすることができ、理解につながった。

### (2) 場面の様子のイメージ化を図り意欲を高めるための拡大提示

○学習意欲が十分でない児童に対して、ICTを活用して、挿絵を使った場面の様子について提示し、学習意欲を高める。

☆低学年児童には、とても有効な手段であった。特に、感情を盛り上げることにつながり、意欲的な学習ができた。

### (3) 学習のポイントを確実に理解するための活用（放送番組の活用）

○全ての内容をメモをしようとして、遅れてしまう児童に対して活用し、後で役立つメモの取り方を理解させる。

☆メモにおいては短い言葉で表すことや番号や記号を活用することが大事であることを理解し実践につながった。

### (4) 客観的に自分の話し方を見直すための工夫

○話すことが苦手な児童に対して、ビデオや写真を見ながら発表することで、意欲的に学習に取り組めるようにする。

☆話し方を取って見直す工夫を取り入れ、話す速さ、声の大きさ、目線も振り返ることができた。

### (5) 漢字や熟語の読みや基礎的な言語事項を覚えるためのフラッシュカード的活用

○漢字の読みが苦手な児童に対して、授業の始めに漢字を提示し、その読みを繰り返し練習する場を設ける。

☆漢字をきちんと読めるようになり、毎日の音読にも積極的に取り組むようになった。

(6) 伝統や文化に関する言葉への関心を持つ児童の育成

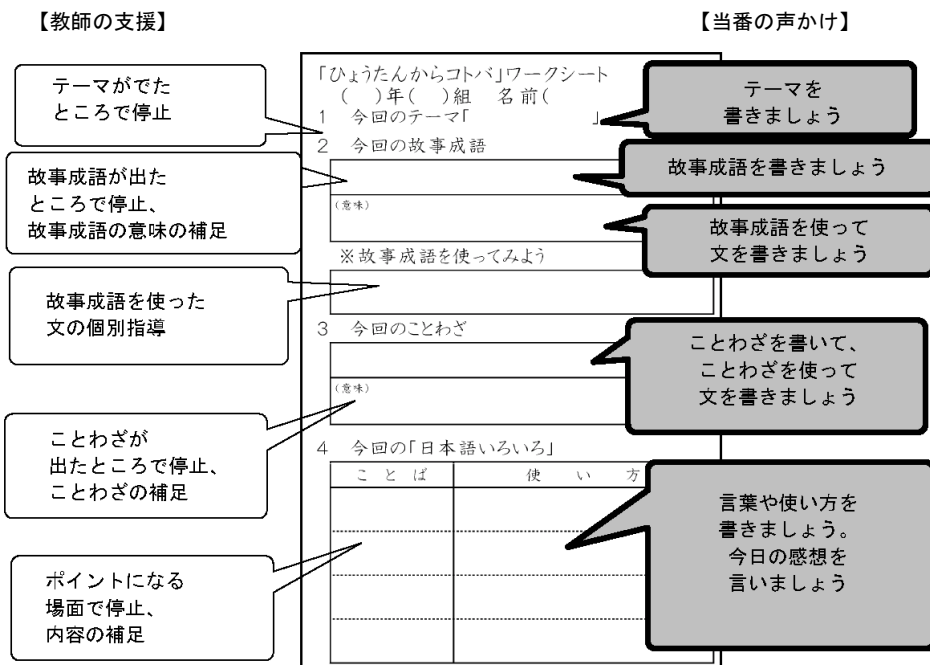
番組の特性を活用し、番組視聴については「理解する場」ととらえ、「理解する場」の後に番組を一時停止し、学習した「故事成語」や「ことわざ」を活用した文章を作成するという「考える場」を設定することとした。考える場を設けることで、ただ番組を視聴するのではなく、児童が学習するという意識をしっかりと持つことができると考えた。番組は、ほぼ同じような内容で繰り返し学習が進められるので、ワークシートを活用しながら（図1参照）、児童が主体性を持って学習に取り組めるように、進行は児童が行うようにした。教師側は「難しい言葉の意味や使い方の補足」「文章作成において苦手意識を持つ児童への個別指導」「必要と思われる助言」を行うのみとした。

5. 研究の成果と今後の課題

- 授業実践シートを活用することで、「授業の流れ」と「ICTの特色」、そして「教師の支援」が明確になり、目的をはっきりとさせ実践に取り組むことができた。特に、対象児童を明確にして実践を行うことにより、効果をあげることにつながった。年度末における、実態調査においても、クラス全体の数値も少しずつ上昇していた。本年度は、実践の数が少なかったため、対象児童を明確にしてさらに実践を進めて行く必要がある。
- 「ひょうたんからコトバを見て、はじめて故事成語を知りました。すごいなあと思いました。故事成語を使って文を書くのはむずかしいけれど慣れてくると少しずつ書けてきたのでうれしかったです。」「これからも、もっと

いろいろな言葉を覚えてその言葉をいっぱい使いたいです。」「初めて知った言葉があるとどんな意味か考えてしまいます。意味を覚えられると家に帰ってお母さんに問題を出すこともありました。」「感じ方はそれぞれであるが、番組を活用して、言葉に対する関心が高まったことはそれぞれの文から感じる事ができた。今後、年間計画にどう位置づけて実践を図っていくかを考える必要がある。

○ 実践を進めて行くことで、教師のICT活用が進み、ICTを「どこで」「どんな目的で」「誰のために」活用するかを考えることで、教師自身の指導力の向上につながった。今後も、様々な場面での活用を図っていく必要がある。



【図1 ワークシートを活用した1単位時間の進め方】

参考webページ

○<http://kayoo.org/>「火曜の会 HomePage」